

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」



フィクション劇場
「情報爆弾」
第三話

大太
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑
問に思っていることなどに対して、「も
し、こういう設定や条件になったら、当
事者たちはどう動くのか」を考えたオム
ニバスドラマです。フィルム・バイヤー
さんではドラマ部門に全二十五話をまと
めて公開しており、それと同様に完全著
作権フリーですので、詳細はそちらをご
覧下さい。マスメディアに少々風が向い
ている「性根の曲がった社会派ドラマ」
で、この第三話はその中から、芸能人関
係を題材にした作品をセレクトした話と
なります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

【登場人物】

霜月 雅彦（しもつき・まさひこ）（31）：
人気俳優

市川 達也（いちかわ・たつや）（23）：
霜月の後輩俳優。霜月のことを「マサさん」と呼ぶ

足立 智（あだち・さとる）（37）：
ダーク
ウェブ探偵

岸山 吾郎（きしやま・ごろう）（51）：
警察官。証拠品保管責任者。役職は警部

花井（はない）（45）：
週刊誌 編集長

新島（にいじま）（43）：
週刊誌 副編集長

富樫（とがし）（35）：
女性レポーター

松本（まつもと）（39）：
男性レポーター

平林（ひらばやし）（37）：
男性レポーター

古谷（ふるや）（59）：
男性レポーター

永田（ながた）（33）：
カメラマン

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

木原 浩之（きはら・ひろゆき）（37）：レポ
ーター。回想シーンで霜月の車に追突され
る

奈良沢（ならさわ）（67）：霜月と市川の出
演する舞台監督

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー司会
者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ
スタント

ニュースキャスター（40…女性）

郵便配達員

タクシー運転手

【あらすじ】

俳優の霜月雅彦は、メディアの振る舞いに怒り、ダークウェブからメディア上層部の個人情報調査を足立智に依頼し、リスト化する。

そのリストの存在を知る者は、キツネのハンドサインをするため、関係者の間では、このリストを、「フォックスリスト」と呼び、これを示した者に対して、取材を躊躇うことが起こっていたが、真偽は不明だった。

しかし、借金を抱えていた警察官の岸山吾郎が、別件で逮捕された足立のPCデータを週刊誌に持ち込み、実在することが分かった。

週刊誌は、特ダネだと見たが、記事にするには、リストのプライベート情報を出して証明しなければならず、これを断念する。

そして、週刊誌はリスト掲載者に金で揉み消す提案し、受けた者の情報を書き換えた。

その後、ワイドショーがこのリストがデータだと報じる。そして自分達にもプライベートやプライベートがあると主張する。

○霜月雅彦の自宅（昼）

自宅前に芸能リポーターが集まっ
てい
る。

霜月が家から出てくる。

富樫「霜月さん、例の女優さんとはどのよう
な関係なのですか？」

松本「ショッピングモールで彼女と一緒にと
ころを見たという方がいましたが、本当で
すか？」

霜月は、芸能リポーター達を見下して、
右手でキツネの形を作る（音：カーツ）。
芸能リポーター陣は、静かになって、後
退りする。

尚も、霜月が前に進む。

芸能リポーター陣は、また後退りする。

霜月は周りを見回す。

霜月「…みなさん、どうされました？」

霜月「私の家まで来て、手ぶらでは帰れない
でしょう？」

霜月「今、タクシーを呼んでいます。みなさ

んにまた：」

霜月は、木原浩之の方を見る。

霜月「お怪我をさせてはいけませんから。来るまでに少しだけですが、時間があります。お聞きになりたいことがありましたら、お受けしますよ」

芸能レポーター陣はお互いに見回す。

平林「：それでは、よろしいですか？」

霜月「はい、どうぞ」

平林「例の女優さんについてですが：」

霜月はレポーターを睨みつける。

平林「い、いえ：」

平林「こ、今度の舞台の抱負をお聞かせ下さい」

霜月の表情が緩む。

霜月「はい。今度の舞台は、私にとっては初めてのことばかりですが、逆に挑戦のしがいがある仕事だと思っています。先輩のみなさんに色々と教えて頂きながら、最高のものを作っていければと思います」

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

タクシーが来る。

× × ×

タクシーの後部のドアが開く。

霜月が乗り込もうとしながら、

霜月「舞台の方、楽しみにして置いて下さい」

× × ×

タクシーが去っていく。

富樫「…また、コレかよ」

松本「これで、何人目だ？」

古谷「5人目くらいだ。勘弁して欲しいよ」

永田「古谷さん、みんな取材をためらってた

みたいですが、何かあるのですか？」

古谷「永田、お前知らないのか？」

永田「はい」

古谷「霜月がキツネのハンドサインしてた

ろ？ アレがマズいんだよ」

永田「何か意味があるんですか？」

古谷「大アリだ。あれは、オレらのプライベート

ー情報を握ってるってサインだ。柿本（第

1話「芸能リポーター」参照）って女のし

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

ポーターが居たろ？」

永田「ええ、話は。結構、やり手の方だったと聞いていますけど…」

古谷「あいつが突然、辞めちまったのはこれのせいじゃないかって噂なんだ」

永田「じゃあ、その柿本さんの情報を、誰かが持っていたってことですか？」

古谷「そういうことになるな」

永田「誰がですか？」

古谷「分からない」

永田「分からないって？」

古谷「分からないものは分からないんだよ。それに誰のどこまでの情報を知っているかも分からないから、余計に夕チが悪い。もしかするとオレ達が騙されているかも知れないんだよ。だから、レポーターの間では、キツネのハンドサインに引っ掛けて、その情報リストを『フォックスリスト』って呼んでるんだ」

永田「そうなんですな」

古谷「さっきも言ったように、あの手の形をしたからといって、そのリストを持っているとも限らないし、そもそもそういうリストがあるかどうか分からない」

永田「そうなりますね」

古谷「噂によると、情報には、昔、ヤンチャしたり、ちょっとした悪いことをしたことも書いてあるらしい」

永田「例えば？」

古谷「子供の頃、駄菓子屋からアメをがめたとか」

永田は、苦笑いを浮かべながら、

永田「古谷さん：、いくら何でも、そういうのはもう時効というか：」

古谷「いや、そうとも限らない。週刊誌なんかは、何十年も前のことでもネタにするからな」

古谷「それに、家族や子供の通っている学校とかも載ってるって話もある。踏み込むのはリスクが大きいんだよ」

永田「でも、そのフォックスリストを持って
いる可能性があるのは、限られた人だけな
んでしょう？」

古谷「そうだ。持っているぞ、っていうヤツ
は、さっきの霜月のようにキツネのハンド
サインをする。だが最近、そうする芸能人
が増えているんだよ。元締めを見つけて、
はっきりさせない限り、手が出せない」

永田「大元を見つけることはできないのです
か？」

古谷「オレたちも動いているが難しい。まさ
か、あなたは持っていますか？ とか、ど
こからこのリストを貰いましたか？ なん
て聞いても教えてくれる訳ないだろ？ 自
分たちの身を守るために使えるものだ。話
す訳がない」

永田「そうですね…」

○タクシーの中の霜月（昼）

霜月がタクシーに乗っている。

霜月M「うまくいってるようだな…。

（回想シーン始め）

○霜月の自宅（昼）

芸能レポーターが霜月の家に群がる。

もみくちゃにされながら、霜月が自分

の車に乗って前に動かそうとする。

しかし、レポーター達が周りを群がっ

たまま。

霜月は窓を開けて、身を乗り出す。

霜月「みなさん、危ないですから、車から離

れて下さい！」

レポーター陣はあまり離れず。

霜月がアクセルを少し大きめに踏んで

しまう。

レポーターの足にあたる。

木原浩之「痛っ！」

霜月は車を降りて、木原に駆け寄る。

霜月「大丈夫ですか？」

木原は足を抱えて痛がる。

霜月は、スマホを取り出し、救急車を呼ぶ。

霜月「もしもし、すみません、救急車を回してもらえませんか？」

（回想シーン続き）

○霜月の自宅（数週間後）（昼）

霜月はリビングのソファに座り、テーブルにノートPCを広げて、くつろいでいる。

霜月「…さて、次の舞台の台本でも読み込むか…」

呼び鈴がなる。

霜月がインターフォンまで歩いていく。

霜月がインターフォンの応答ボタンを

押し、画面に顔を近づける。

霜月「はい」

配達員「霜月さんのお宅ですか？ 簡易書留

です」

霜月「はい。伺います」

霜月は、簡易書留の受領証に印鑑を押す。

配達員「どうも」

霜月は封筒の裏を見る。

木原の所属する芸能レポーター事務所の文字（書留なので、フル住所名前）

霜月「何だろ？」

霜月はリビングに戻る。

霜月は、封筒を開ける。

中には「霜月 雅彦様、先般の弊社社員
木原 浩之の怪我に関しまして、以下、
請求致します。振込先は 住吉銀行
大平支店 普通 3757674。二
週間以内にご入金下さい」の紙とともに、
怪我をした木原の診断書と治療費
の請求書が入っている。

霜月、怒り心頭。

霜月は、その診断書と治療費を凝視する。
る。

霜月「これを…、オレに払えって言うのかっ？」

(回想シーン続き)

○霜月の自宅(昼)

霜月の部屋に中古PCの入っていた空の段ボール。

霜月がその中古のノートPCを操作している。

霜月「これで、行けそうか：？」

霜月がデスクトップにある長ネギアイコン(名前はscallion)をクリックしてダークウェブの画面を立ち上げる。

霜月はマウスで画面をスクロールしながら、身元調査系を探す。

霜月「身元調査なんでも請け負います：。正確無比情報量MAX。まずはチャットにてお問い合わせを：か」

霜月はチャット画面をクリックして開く。

○同 (セリフはチャットの文字)(風)

霜月「話が出るか？」

少し、間が空く。

足立智「大丈夫だ」

霜月「周辺調査を頼みたい」

足立「調査範囲は？」

霜月「全部だ」

足立「具体的に言ってくれ」

霜月「顔写真、勤め先、住所、年齢、電話番号、職歴、学歴。偽名を使っている場合は

本名だ」

足立「それだけか？」

霜月「家族構成。子供がいる場合は、学校名

もだ」

足立「手間だな」

霜月「あと、過去にやらかした悪さも頼む。

どんな小さなことでもいい」

足立「欲張りすぎじゃねーか？」

霜月「500万出す」

少し、間が空く。

足立「やる気が出るね。OKだ」

足立「で、誰だ？」

霜月「30人だ」

足立「ますますやる気が出るね。引き受けるぜ」

霜月「その前にやって欲しいことがある」

足立「何だ？」

霜月「オレが誰だか当ててくれ」

少し、間が空く。

足立「試すって訳か？」

霜月「額が額だからな」

足立「分かったよ。2〜3時間待ってくれ」

霜月「1時間だ」

少し、間が空く。

足立「気に入ったよ。1時間だ」

霜月はコーヒーを飲みながら、画面を見ている。

チャットの返事が画面に現れ、霜月は画面をのぞく。

足立「待たせたな、俳優の霜月雅彦さんよ」

霜月はニヤツと笑う。

足立「満足か？」

霜月「ああ。金は仮想通貨だな？」

足立「先払いでな。リストも頼むぜ」

霜月「分かった。30人分振り込んでおく」

足立「額が足りないぜ」

霜月は首を傾げる。

足立「31人分だ」

霜月はまた、ニヤツと笑う。

霜月「了解だ」

足立「リストの受け渡し方法は？」

(回想シーン終わり、チャットの文字終わり)

○タクシーの中の霜月(昼)

霜月がタクシーに乗っている。

霜月M「…せいぜい震えてな…」

○ホール(舞台練習)(昼)

まだ、衣装は着ていない。

出演者は、舞台上で位置取りの確認をし

ている。

舞台監督（奈良沢）は、舞台の中央で上手にいる市川達也に手招きをする。

奈良沢「市川くん！」

市川達也「はい！」

奈良沢「市川くんは、上手から出て来て、この位置で、セリフ。いいね！」

市川「はい！」

奈良沢は少し強い口調で、床を指差しながら、市川の顔を見て、

奈良沢「君の立ち位置が決まらないと、他のみんなが迷うから。ブれないように！」

市川「はい！」

奈良沢が手を2回叩く。

奈良沢「ようし、それじゃあ、15分休憩にしよう」

各々、舞台を降りて、客席に座って飲み物などを飲んでいる。

霜月が紙コップに入れたコーヒーを持って、市川の横に座る。

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

霜月「達也、どうかしたのか？ 演技にキレがないような気がするが：」

市川「さすがマサさんですね。周りに迷惑をかけないように演じてはいるんですが：」

霜月「何かあったのか？」

市川「はい。実は最近、お付き合いし始めた女性がいました：」

霜月「そう言えば、ワイドショーでやってたって話は聞いたことがあるな」

市川「はい。既に芸能レポーターが嗅ぎつけているみたいで。一般人の方ですから、名前こそ出ていませんが：」

霜月「それで、演技に身が入らないって訳か：」

市川「情けない話ですが、おっしゃる通りです。今回はボクが主役ですから、舞台を壊すようなことはしたくないのですが：」

霜月「下手なマネをすれば、その女性にこじつけられる可能性もあるしな」

市川「その通りです：」

市川「マサさんは一時期に比べて、そういう話題が減っている感じなのですが、何かいい方法があるのですか？」

霜月は少し考える。

霜月「…方法はある」

市川が霜月の方を向く。

市川「あるんですか!？」

霜月「ある…。達也、お前、口は堅いか？」

市川「もちろんです！ 必要ならお金でも何でも：」

霜月は、市川の話を遮る。

霜月「金は要らない。約束を守ってくれるだけがいい」

市川「約束…、ですか？」

奈良沢が2回手を叩く。

奈良沢「じゃあ、続きを始めるぞ！」

霜月が立ち上がる。

霜月「後で、連絡する」

○ゲネプロ（舞台スタッフ&キャストインタ

ビューン（風）

メディアも入れてのリハーサル（ゲネプロ）。

役者は衣装を着ている。

後には、舞台名が入ったよくあるベニヤ板。

レポーター陣が奈良沢を狙ってマイクブームポールを近づけている。

インタビュアーは富樫。

富樫「監督、ありがとうございます」

監督が上手（向かって右）にはける。

下手（向かって左）から、白のタキシードに胸に赤いハンカチを入れた、市川が入ってくる。

マイクブームポールを持っている取材陣がずずっと少し下がる。

富樫は恐る恐る市川にインタビュースる。

富樫「い、市川さん…、イ、インタビュースても、…よ、よろしいでしょうか？」

市川、笑顔で、

市川「もちろんです。今日は舞台の宣伝も兼ねていますから」

市川「ですの〜」

市川は目だけを富樫に向けて、ニヤツとして、低い声で、

市川「舞台の話だけに…、して下さいね？」

マイクブームポールを持っている取材陣がまたずずっと少し下がる。

富樫、テンパる。

富樫「も、もちろんです！ もちろんです！」

富樫「こ、この舞台への、い、意気込みを…」

市川「いや、準備万端です。〃公私〃ともに充実していますし、〃みなさんのおかげで〃安心して、舞台に打ち込めています。これも先輩である霜月さんのおかげです」

霜月が黒のタキシードにシルクハットとステッキとつけ髭姿で下手から出てくる。

霜月「おい、達也！」

霜月はステッキで、市川の足を叩きながら、登場する。

霜月「お前が主役だろ？ もっとドーンと構えてろよ」

霜月・市川「ははは」

レポーター陣は顔を引きつりながら苦笑い。

○TVニュース（数日後…夜）

キャスター「今日、午後6時ごろ、TV局のサーバーに侵入し、社員情報を盗んだとして、住所不定無職の足立 智容疑者32歳が逮捕されました。足立容疑者は、いわゆるダークウェブで依頼を受け、個人の身辺調査を行っていたと見られています。警察では容疑者のノートPCを押収し、データの解析を続けており、余罪があるものと見て、捜査を進めています」

○警察署（証拠品部屋）（数日後…昼）

岸山吾郎が足立のノートPCを調べている。

岸山「暗号化解除のパスワードをゲロしたから、復号するか？」

復号すると、「依頼一覧」というフォルダが出てくる。

岸山がフォルダをクリックすると、ファイル名が数字「1、2、3」のエクセルファイルが300くらい出てくる。

岸山「：随分と、繁盛してやがったな。解析に時間がかかりそうだ：」

すると、岸山のスマホが鳴り、SMSで「07」のメッセージが表示される。

岸山はびっくりして、証拠品部屋の外に出て、妻に電話をかける。

岸山「お前か？ 今か？ いや、今はない。いくらだ？ 200万!? なんとか明日まで待ってもらおうように言ってくれないか？ 必ず何とかするって話をしてくれ。ああ。とにかく今日は無理だ。なんとか頭を下げ

て引き取ってもらおうと言ってくれ。頼む」

岸山は電話を切る。

岸山は証拠品部屋に戻る。

岸山 M 「…いよいよヤバイな…」

岸山は証拠品を見回す。

岸山 M 「…証拠品は…、無理だ。すぐバシる

…」

岸山はノートPCを見る。

岸山 M 「この情報をどこかに高く売れば…」

岸山は押収したノートPCのデータを

USBメモリに入れて持ち出す。

○居酒屋（週刊誌記者との接触…その日の夜）

岸山が居酒屋に入って、店員と話をす
る。

岸山は、個室に通される。

岸山は個室で正座して、ソワソワして
いる。

週刊誌副編集長の新島が入ってくる。

岸山はお辞儀をしながら、

岸山「すいません、新島さんですか？　お呼びだてしてしまってます」

新島「いえいえ、岸山さん。こちらも逮捕された足立ってヤツのPCに何が入っているかは気になりますからね。特に個人情報ってところが」

岸山「データは一通り持ってきたのですが、どうにも分からないことが多くて……。とにかく高く買って欲しいんですよ」

新島「まあ、そう焦らずに。とにかく、データをを見せて下さい」

岸山は新島にUSBを渡す。

新島は自分のノートPCを取り出し、USBメモリを差し込む。

新島はUSBメモリに入っているファイルを見て行く。

新島「これで、全部ですか？」

岸山「はい、全部です」

新島はフォルダの下の「項目」の欄を見ると、「352項目」とある。

新島 M 「ファイルが300以上あるのか…。
全部見るのは手間だな…」

新島が画面をスクロールしていくと、
一番最後に「一覧」という名のファイル
がある。

新島 M 「まとめたヤツか？」

新島は「一覧」ファイルを開く。

新島は画面に顔を近づけて、ファイル
の中身を見る。

「一覧」ファイルには、左からファイル
名（番号）、依頼受付日、依頼完了日、
ギャラが並んでいる。

新島 M 「やっぱりそうか…」

新島はこのファイルの中身をスクロー
ルしながら、

新島 M 「一件、100万くらいか。結構稼い
でるな」

スクロールを続けていくと、ギャラの
欄に「1億5500万円」の文字を見つ
ける。

新島 M「なんだ!? ここだけ額がデカすぎる」

新島は視線を左に向け、どのファイルか確認する。

新島 M「49番ファイル！」

新島は、49番ファイルを開く。

新島は、スクロールしながら、ファイルの中身を見る。

新島が驚く。

新島 M「こ、これは、ウチの編集部員の情報じゃないか。それに、これは芸能リポーターのやつだ。マスコミの偉いさんの名前もある。…これは、例の『フォックスリスト』だ。本当にあったんだ」

岸山「新島さん、どうでしょうか？ お願いします！」

新島は平静を装って、岸山に、

新島「落ち着いて下さい、岸山さん。お気持ちわかりますが、こちらでも確認が必要ですから」

フォックスリストを指差して。

新島「これらを依頼した人物が誰か分かっているのですか？」

岸山「分かっています。お互い匿名でやりとりしていたようです。」

岸山「ただ：」

新島「ただ？」

岸山「名前は分かりませんが、芸能人からの依頼もあったという供述をしているようです」

新島は考える。

新島「分かりました。買い取りましょう。200万でよろしかったですね？」

岸山は頭を下げて、

岸山「はい！ありがとうございます！」

新島「ただし、USBごと頂きますよ？ 他

言は無用です」

岸山「もちろんです！」

新島はカバンから200万円を取り出し、テーブルの上に置く。

岸山は200万円をもぎ取り、席を立

とうとする。

新島「岸本さん」

岸山は新島の方を振り返る。

新島「：もう少し、お聞きたいことがあるの
ですが：」

○週刊誌編集部（次の日…昼）

編集部の会議室。

編集長の花井と新島が立っている。

花井が机の上のノートPCの画面を覗
き込んでいる。

花井は直立して、画面に視線を向けた
まま、

花井「ホントにあっただんだな：、『フォックス
リスト』ってのが：」

新島「はい。他のファイルも調べましたが、
どうやらこれだけのようです」

花井「それにしても、調べ方がうまいな」
新島「私もそう思います。現場のレポーター
は数が多いので、全員という訳には行きま

せんから」

花井「：だから、マスコミ・メディアの偉い
さんを主に狙ってってことか：」

新島「はい。自分の振る舞いで、上の情報が
漏れる可能性があると分かれば、下の連中
も迂闊なマネはできませんから」

花井「その辺は、上に匿名のメールでも送っ
てるんだろうな」

新島「そう思います」

花井「しかし：、これをどう出すかが難しい
な：」

新島「そうですね。少なくともウチの部員は、
消した形になると思いますが：」

花井「載ってた部員には？」

新島「はい、すぐに電話番号を変えさせて、
引越しの準備をするよう言いました」

花井「：ならいい」

二人は考える。

花井「もう少し、コレのウラが欲しいな：」

新島「ええ。容疑者の足立ってヤツは、依頼

者に芸能人が居たと話してるらしいのですが……」

花井「芸能人か……。まあ、こういうのを欲しがるのはその手の人間だろうからな」

新島「はい」

花井「……一番最初に例のサインをしたのは、誰か分かっているのか？」

新島「はっきりしていませんが、俳優の霜月じゃないかという話を聞いています。その線で動きますか？」

花井「いや、今はまだ早い。下手に刺激して、このリストをばら撒かれでもしたらシャレにならない」

新島「そうですね。金を払って入手したスクープがパーになりますから」

花井「そうそう、その金だが君から700万欲しいと言った時はびっくりしたよ。その警官は200万でいいと言ったんだろう？」

新島「はい。しかし、金を渡してから、そいつと話をしたのですが、他に300万円ほ

ど借金があるそうで。一応、今回の件は口外するなどは言いましたが、いざとなれば、このデータを別のところに売りかねません。ですので、借金をチャラにして、それと当面の生活費と合わせて700万円渡ししました」

花井「なるほどな……。保険ってところか？」

新島「はい、そうです」

花井「先々の情報提供代の前払いってところもあるしな」

新島「はい。コネクションは作って置いて損はありませんから」

花井と新島は腕を組んで考える。

花井「：しかし、ホントに難しいな、これは。霜月がやったってことは探るのはリスクがある。かと言って、業界でこれだけ話題になってるこのリストの存在をお蔵入りさせるのはもったいない」

新島「はい。そもそも追い詰める相手がいませんから、第2弾、第3弾と打ったところ

で効果が薄いです」

花井「ああ。リストの信憑性を小出しにする
ことも出来るが、誰かのプライベート情報
を出して、『この人の情報は合ってるから信
憑性が高いですよ』なんて言える訳がない」

新島「そんなことをすれば、訴えられかねま
せんしね」

花井「うーん、難しいな」

新島「どうでしょう、編集長。リストにある
ヤツらに個別に話を持って行って、金で揉
み消すかどうか聞いてみてはいかがでしょ
う？ 応じなかったところは出すぞ、とい
うことで」

花井「：悪くはないな。ウチとして動きにく
いのは確かだし、普通の記事ではメリット
が薄い」

花井「しかし、金で揉み消すと言っても、既
に持っているヤツがいるだろう？ それ
が出ないようにする保証が必要だと思うが？」

新島「はい。これは早速、あの警官に動いて

もらおうと思っています」

花井「具体的には？」

新島「リストの書き換えです。どこまで書き換えるかは、話を持っていく連中が決めるということだ」

花井「そうすると、多分、全員、金払って消してくれ、になりそうだが……」

新島「その場合は、偽の住所・電話番号に差し替えるというのはどうでしょう？」

花井「それは分かるが……でもどうやってすり替える情報を決めるんだ？ 一般人を巻き込むと面倒臭いぞ」

新島「ネットで適当な中小企業を見つけて、その住所・電話番号に書き換えます。リストを見た連中はまずそこに問い合わせるでしょう。ですが、当然、そんなヤツはいません。それでストップです」

花井「なるほどな」

新島「あとは、例の警官に証拠品に入っているPCのデータと入れ替えてもらいます」

花井「タイムスタンプは大丈夫なのか？」

新島「間違ってる消してしまったので、USBメモリに取っていたバックアップを入れた、とかなんとかで誤魔化せるかと」

花井「分かった。それで行こうか」

新島「で…、いくらにしましょうか？」

花井「そうだな…。一応、メディア間の阿吽の呼吸ってのがあからな…。やり過ぎは良くない」

新島「ええ。でも数百万ってのは安すぎると思います。前にそいつを足蹴にしてやったことがあります」

花井「そうだな…。まあ、多少、吹っかけても大丈夫だろう。1000万円でやってくれ」

新島「全部で3億ですね。分かりました」

○ワイドショー（2週間後くらい…昼）

宮原「それでは、次の話題に行きましょう」

澤田「はい。先日、TV局のサーバーに侵入

して、社員情報を盗んだ疑いで逮捕されました足立智容疑者ですが、取り調べの供述で、何者かの依頼を受け、マスコミ・メディア関係者のプライバシー情報のリストを作成していたことが分かりました。これは通称『フォックスリスト』と呼ばれているものだとのことですよ」

宮原「TVをご覧のみなさんは、あまりご存じないかも知れませんが、業界では有名な話というか、都市伝説というか……」

澤田「はい、そうです」

宮原「それで、警察は何と？」

澤田「リストに掲載されていたとされる関係者に確認を取っているとのことですが、詳しい内容はプライバシー保護の観点から公表を差し控えるということでした。ただ、私どもの独自取材によりますと、リストに記載されている、住所、名前、電話番号の全てが一致している人物は、まだいないようです」

○霜月の自宅（同日…昼）

霜月はTVのワイドショーを見ている。

霜月はコーヒーを飲みながら、

霜月M「偽物ってことにした訳か…。まあ、オリジナルを持っているのはオレだけで、達也とかにはキツネのサインをすれば良いって、言っただけだからな。金がいくら動いたか知らないが…」

霜月は、またコーヒーを飲む。

霜月M「ま、でも、これで足立ってヤツの口からオレの名前が出て、依頼はしたが偽物をつかまされたって言い訳が出来るし、偽物にしたヤツらは、オレが本物を持ってるってことが分かるから、手は出せないだろうし…。もう少し、楽しませてもらうとするか…。黄門様になった気分だ…」

霜月M「これからフェイクでこういうことをしても、メディアは身構えるようになるかな。億の金を使った甲斐はあったってと

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

こか：「

〇ワイドショー（続き…昼）

宮原「しかしこれは、かなり悪質な事件ですね」

澤田「そうですね」

宮原「まあ、プライバシーについて言えば、こういう番組をやっていると、視聴者の方からいろんなご批判もあります。ですが、私たちにも当然、プライバシーというか、プライベートと言いますか、そういうものはあります」

宮原「子供に会いにいったりもしますし、食事もします。食事の後に一服するくらい、いいじゃありませんか？」

E
N
D

（2025年6月15日 初出）

（2025年10月1日 単話アップ）